# 文化祭作品展

とよおか
第 754 号
発行人●豊丘村公民館
館長　市澤和宏
編集人●長野県下伊那郡
豊丘村公民館報
編集委員会
0265－35－9066
印刷所●龍共印刷株式会社

**私たちの村**
（12月1日現在 ※外国人を含む）

| | |
|---|---|
| 男 | 3，272人 |
| 女 | 3，300人 |
| 総人口 | 6，572人 |
| 世帯数 | 2，241戸 |

## 1年間の努力の結晶を堪能

公民館文化祭作品展が十一月五日から十二日までの八日間、ゆめあるてで開催されました。今年は催事も含めて三十一の団体・個人の出展があり、多くの力作が館内いっぱいに飾られていました。とよおかまつりの期間とも重なり、多くの来場者で賑わいました。

### 森の仲間づくり

サロン林里　森田節子

例年、公民館文化祭作品展には、何か作品を飾らせていただいていましたが、今年は何にしようか、仲間と楽しく出来るものは何かと、考えました。紙粘土を使い、動物、花などを作ったらどうだろうかと思いました。本で見ると簡単そうでしたが、自分で作ってみると難しい。子供の頃に遊んだ粘土細工を思い出したのですが、形を作るとなると、作りたいものにはほど遠く、動物の耳、鼻、手足など、全く出来ませんでした。幸い、スタッフの中の奥さんが、粘土の人形を作り作品を見せていただいていましたので、早速教えてもらうようにお願いしました。

紙粘土にはいろいろな種類があり、白い粘土には絵の具で色をつけ、白い作品には色をぬりました。粘土が一つ、二つ、動物、野菜、花などが出来上がっていくと、楽しく、喜びにかわってきました。

最初は粘土なんてと思っていたのですが、材料費も安く、テーブルの上で皆でワイワイとこねこねと、大根、人参、キリン、犬等、多くの作品が出来ました。

教えていただいた方に感謝しながら楽しい時間が過ごせた事をうれしく思いました。

### パッチワーク

四人会　片桐充子

公民館文化祭作品展に、私達が心をこめて作った、趣味のパッチワーク作品を、展示させていただきました。

色や柄のちがう布で作ったポーチ、実用的なバッグ、季節ごとに飾って楽しむことのできるタペストリーなど、それぞれ、思い思いの作品が出来上がりました。

少しでも、心がなごんでいただけたら…と思いました。

一ヶ月に一回くらいのペースで集まり、家で作った物などを持ちより、楽しくおしゃべりしながら、好きな縫い物をする…楽しく、充実した時間をすごしています。

## 一段丘

車で冷たい霧を抜け、フルーツラインまで上がると、霧が雲海のように見えるビューポイントがある。おもわずその美しさにため息がでる。そんな時口から自然とこぼれるのが「大地讃頌」の歌。中学生の時に歌った。残念ながらアルトパートしか歌えないので、主旋律を歌うことなく私の大地讃頌はエンドレスに進んでいく。正確な歌詞を思い出せないので、最後までたどりつけないのだ。

こうしたふとした時に口ずさむ歌は、幼い頃に教えてもらった季節の歌などだ。紅葉を見れば、「真っ赤だな～」と歌い、雪が舞えば「雪やこんこん～」と歌いながら、「雪積もるな」と呪文を繰り返す。幼い頃の方が記憶力がいいのか、それとも歌いやすいリズムと歌詞のせいなのか、親が口ずさんでいた古い歌も覚えていて、（しかも親の音程と声で）元々の歌を検索すると、音や歌詞がえらい違うことが多々ある。ということは、私の歌を子どもたちが思い出した時、同じ思いをするのだろう。ごめんよ母はオンチなのだ。

この一年もいろいろあった。社会も大きく動いた。その時も私は子どもの頃の歌を口ずさんでのりきった。歌って案外力があるのかもしれない。今は「もういくつねると～」の歌。私はお年玉を渡す大人なのだ。

（小池淳子）

# 久保田諌さんを偲んで（四）

中部　筒井恵子

**「語りを次世代へ繋ぐ使命」**

令和五年が終わろうとしておりますが、ロシアのウクライナ侵攻は終わりが見えずまたしてもイスラエルのガザ地区への攻撃が今尚続いております。罪のない市民が砲弾や銃撃に怯えている報道が連日伝えられ心が痛みます。日本でも七十八年前にはこの様な悲惨な戦争があった史実をこれからを生きる孫達にも伝えておかなくてはと、時にはテレビを一緒に見ながら「戦争は小さな赤ちゃんやお父さんお母さんそして多くの人の命も奪ってしまうんだよ。家も壊され、食べ物も水も飲めなくなっちゃうの」と話しますと「戦争は絶対ダメだよネ」と小学生の孫達。折りにふれて「毎日おいしいご飯が食べられるのも学校へ行けるのも、戦争がなくて平和だからだよ」と孫との会話。そんな日常の六月の初め、久保田さんの訃報が突然届き、従姉妹達とお宅へ伺い「長い間本当にご苦労さまでした」と最期のお別れをさせていただきました。私は久保田さんの事を幼い頃から萬年屋のおじさんと呼ばせてもらっており、おじさんも「恵子さんおるかな」といっては父母亡き後も村や河野区で行って下さる慰霊祭や祖霊祭の通知を持って来て下さいました。時にはお茶を飲んでいって下さった事もありそんな時には「オレはナー毎日憩の家の風呂に行っとるんナ。旨い物も食べたり、こんなに幸せだけど満州で死んじゃった衆のことを思うと申し訳なくて」とボツリボツリ話されます。あちこちで語りをされた久保田さんでしたが、父は団長だった祖父の最期や妻と二人の子供（五才と三才）の死について「恐ろしくて聞けんナー」といっていた事、忘れません。遺族の皆様も同じではなかったかと思います。戦争がなかったら、国策に翻弄された満蒙開拓がなかったら、おじさんの戦後の苦悩の日々はなかったのにと、戦争を憎みます。戦後を生きて帰った久保田さんや父達は海外犠牲者遺族会を立ち上げ、再び戦禍を繰り返さないために永遠の語り部たらんことを願って四百余名の名前が刻まれた石碑を建立してくれました。おじさんの語りで判明した団の最期の地より掘り出された遺骨が中国より厚生省に届けられて下伊那から山本慈昭さんと父が遺族を代表して厚生省へ受け取りに行き石碑除幕式に納められました。満蒙開拓記念館の寄付集めにも尽力された姿、忘れません。ご冥福をお祈り致します。

**満蒙の拓地に眠る同胞（はらから）の**
**無念伝える丘の石碑（いしぶみ）**
合掌

# 歌は世につれ～　二十八話

## 人生の黄昏期を迎えて（二）

### 『落陽』

上佐原　小池　光好

人生の黄昏期を迎えてしみじみ感慨深く聴く歌。今回は吉田拓郎の『落陽』。『落陽』は作詞した岡本おさみが北海道を放浪した時の実体験を基に書いたもので、旅で出会ったサイコロ賭博で身を持ち崩したフーテン暮らしのじいさんの人生と港でのじいさんと若者との別れ際の情景を綴っている。

♪みやげにもらったサイコロふたつ　手の中でふればまた振り出しに　戻る旅に陽が沈んでゆく♪♪あんたこそが正直者さ　この国ときたら　賭けるものなどないさ　だからこうして漂うだけ♪　理想や目標を持てずに旅をしていた若者がフーテン暮らしになってしまった男に憧れにも似た感情を覚えたが、水平線に沈む夕日を見つめて何を思っただろうか。「陽は沈むがまた昇る。その繰り返しだ。振り出しに戻って新たな（人生の）旅に出よう」と人生双六の振り出しに立つ決意をしたことだろう。『落陽』には男の悲哀や孤独、希望などが込められており、〝人生とは何か〟〝自分はどう生きてゆくのか〟に思いを巡らすと、虚無・虚脱感を抱かずにいられない。

振り返れば、気概の乏しさ、自信の無さ、経済的観点などから人生を賭けてまで選んだ道はなかった。流れに身をまかせ平々凡々と生きてきた。決して後悔はしていないが、「正直に生きてきたか」と問われれば沈黙せざるを得ない。それゆえに「あのじいさん」のような自分の信念を貫く生き方に、身を持ち崩してまでと思いつつも、『男はつらいよ』のフーテンの寅さん同様ある種の羨望を覚える。人生の黄昏期を迎えた今『落陽』を聴くと、人生の仕切り直しは頭に浮かばない。ただただ回想に耽るとともに人生の下り坂をどう下っていくかに想いを馳せるのみである。

山脈（やまなみ）に沈んだ太陽は上空の雲を明るく照らし、茜色に染める。沈んでなお活き る太陽のようにこの先を全とうできたら幸いである。カッコ良くは生きられないが、カッコ悪い生き方だけはしたくないと思う。

# 夢みた遥か地平線　その7

## バングラデシュ独立戦争後の混乱とチッタゴンの喧噪

北市場一　福澤郁文

チッタゴン駅の到着は夜明け前四時、街は真っ暗だった。夜が明け暗闇の街から目覚めると朝の風景は一変した。

ベンガル語看板が溢れる街、ギャーッ！ギャーッ！と鳴き叫ぶカラスの群れ、白煙をまきあげ、けたたましい警笛を鳴らし走り廻るベビータクシーの数の多さ。

人力リキシャと人の群れは、朝から道路にひしめきあい行き来していた。夜が明けて騒音と喧噪の街が始まった。

異国に来たぞ…という感覚になる。ボランティアとしてこの国に来てはみたものの『この地で役に立てるのかと…』不安に駆られる気持を抑えながら、現地の救援事務所ＣＯＲＲに向かった。

『たてまえは自分たちで準備する』援助チームとして来たとはいえ、いくつもの無理難題があった。ベンガル人たちとプロジェクト協力ができるのだろうか？独立戦争後の混乱もあり社会状況は未だ恢復してはいない。街の救援事務所にしても農業復興援助計画は、難題であることは予想できたのである。

『自分たちで現地救援プログラムを切り開いていけ』という奉仕団団長のことばを思い返していた。日本の援助で輸入され倉庫に眠ったままの小型トラクターの受け取りをはじめ、段取りが組み立てられるまで待つしか、我がチームには他に手段が見出せなかったのだ。

**残されていた戦争の傷跡**

独立戦争が終戦を迎え、バングラデシュは一九七一年、晴れて独立国家になった。チッタゴンの街にはパキスタン軍からの破壊の爪痕がいくつもあった。崩れ落ちたままの鉄道公社ビルから、爆破されたタンカーや貨物船が二つに割れたまま港湾に沈んでいた。幹線道路の脇には戦車の残骸もあった。子どもたちが、その戦車の上で遊んでいるのが異様だった。

チッタゴンの街は、首都ダッカに較べ、高層ビルは少なく平屋の家がひしめきあって建てられているという印象だ。

人びとの生活はとても貧しいように見える。夕方になると道路脇に小さな石油ランプが灯され、家族なのだろうか、灯りを囲むように食事をとっている。

コンクリート道路にはジュート麻のカマス袋が敷かれているが寝具はない。竹で編まれた屋根は、粗末なビニール袋や布などが乗っかっているだけだ。

この街に来るまえの東京しかしらない眼には、想像を超える貧困を観た。

しかし、悲劇的な街の風景と見ていたが、次第にそこに家族が夕食を分かち合う風景、逞しく生きている姿もみた。光景に慣れてくると、僕の中には妙な感覚がおきてくるようになった。

『人間はどんな境遇になろうとも、こうして生きていけるんだ…』という自信のようなもの『東京で俺はいったいなにに怯え生きていたのだろうか…』と。仕事や将来のこと、わが人生の未来を考えたとき、いいようのない不安を抱えて都会で生きていた自分に気づいたのだ。

**派遣先がハタザリ村に決まる**

チッタゴンの街からバスに乗り一時間半ほどの小さなバザール市場のある村に、農大出のMと、二人での派遣先が決まる。

道路を北に向かえばチッタゴン丘陵地帯へ、もう一方の道路はインド国境のアッサム地方に向かう路がある。小さなガソリンスタンドが建ち、ドカンと呼ばれるマッチ箱のような小さな店が連らなる商店街もあった。私の田舎でいえば、一昔前の旧生田村農協前といった風情だ。

宿舎にはコンクリート床の八畳ばかりの小さな宿舎が提供された。部屋の窓には鉄格子がはまっていた。朝、目が覚めると、その鉄格子から子どもたちの眼と顔がいくつも覗き込んでいた。

小型トラクター運転手募集から耕作地の候補など決めていく。デモンストレーション時には、村人たちが集まり黒山になった。珍獣の我々が珍しいのだ。

▲牛車やベビタクシーと人の群れあふれる街



▲戦争で爆破された建物を人力で修復する

# 第7回 公民館学習会

# 元気なうちに片付ける！

今年度第7回公民館学習会は11月28日、ゆめあるてで開れました。今回は住まいプランニング代表の藤森妙子さんに講演いただきました。

みなさんの家では床の上にものを放置していませんか？　ものにつまずいて転ぶと骨折する危険があります。骨折・転倒は要介護の原因の上位です。藤森さんによれば、それらのものは棚を作って収納すれば片付き、キャスター付きの台に乗せれば掃除もしやすいとのこと。

手放す必要があるものでも、処分したくないものもあるはず。そんな時は期限を決めて保管すればいいそうです。ただし「まだ使える」という気持ちは決断を鈍らせるそうなのでご注意を。

また、いらないものは単に捨ててしまうのではなく、スマホのアプリなどを使い必要とする人に売ったり譲ったりしてリユース（繰り返し使う）、リサイクル（再資源化）することも大事です。

生前整理を考えるタイミングは70歳を迎えたとき、と言います。これは平均健康寿命（自分で何でもできる年齢）が70代であるため。平均寿命が80代なので、元気な約10年間を使って片付けを済ませることが大切だそうです。

食品では期限切れが間近で今後使えそうもないものは食品ロスにならないよう、フードドライブなど必要とする人に寄付しましょう。調味料やお酒などで自分の好み以外のものを人からもらった時も同じです。買う時は賞味期限の近いものや廃棄が近づいたセール品を積極的に買うことも、食品ロス防止に役立つそうです。

講演を聞いた80代男性は「自分はものを持っていない方だが、農作業に使った道具などがある。しかし色々な素材が一つになっているので処分の仕方がわからない。今後は今日の公演を参考にしたい」と話していました。（王生雅穂）

# わたしの一冊

小園　小椋　勲子

## 『あめだま』

ペク　ヒナ（作）
長谷川　義史（訳）
ブロンズ新社

孤独な少年が、大きさ、色、形が違うあめ玉を見つけて、そのあめ玉を食べると不思議な声を聞く事ができました。ソファーの声、飼いイヌの声など。このあたりでは、そんなあめ玉ほしいと思いましたが、読み終わった時には、少しの勇気、声を出す事で、状況を変える事ができるんだと、改めて気づかせてくれる絵本だと思いました。感じ方はそれぞれ違うと思いますので、皆さんもぜひ読んでみてください。

寺島一　宮下　武文

## 『居酒屋兆治』一・二（大活字本）

山口　瞳（著）
大活字文化普及協会

居酒屋の主人の一日を描いた一冊です。赤提灯のモツ焼き屋をとおして、主人の考え方や、なじみ客とのやり取りが表現されています。幼友達の女性を最後まで気に掛ける作品です。

居酒屋を舞台にしていますが、人の一生を考える作品だと思います。

この本は図書館の大活字本（大きな文字で書かれている本）コーナーに有ります。老眼鏡いらずで読めました。皆さんもぜひ大活字本コーナーを覗いてみてください。

# こちら資料館 238

## 戦前の映写機 レフシー

先月、資料館で新しい発見がありました。長い間、研修室の棚の上に放置されていた埃（ほこり）だらけのトランクを開けたところ、写真のようなものが出て来ました。

蓋の内側にあった「RECY（レフシー）」という商標を手がかりに調べてみたところ、これは昭和初期の短期間だけ販売された日本独自の家庭用映写機だということが分かりました。

この機種の特徴は、紙のフィルムを使用したところにあります。今から九十年程前のこの時期、セルロイド製のフィルムを使った幻灯機や映写機は既にありました。しかし、機械が重い上フィルムが高価で現像する等の技術が必要でした。

そこで、紙でフィルムを作れば安上がりで、手軽に絵が描けて色も簡単につけられます。いかにも日本人らしい発想で登場したのが、このレフシーでした。

しかし、一つ問題があります。普通の映写機はフィルムに光源の強い光を通してそれをレンズで拡大して投影しますが、紙は光をあまり通しません。そこでレフシーでは、フィルムとレンズとの間に光源を入れ、下に置いた鏡で光を反射させてスクリーンに投影する仕組みになっています。従って、強い光源が必要ですが、光源の熱によって紙のフィルムが焦げてしまいます。ですので、明るい鮮明な画像は期待できないためスクリーンに大写しにはできなかったようです。

資料館ではこのレフシーを二階ウィンドウに展示します。是非ご覧ください。

最後にお願いです。実はこのレフシーには紙のフィルムが入っていませんでした。もし、お持ちの方がいましたらご連絡願います。

（資料館主任　唐澤武彦）

# 図書館からのお知らせ

**＜年末年始休館のお知らせ＞**

十二月二十九日（金）
～一月三日（水）

よろしくお願いいたします。

**＜お楽しみ会のご案内＞**

図書館では、一月のお楽しみ会を開催いたします。

日時：一月六日（土）
十時三十分～
場所：ゆめあるて　研修室三
出演：絵本の会
内容：干支の折りがみをつくって、みんなで楽しみましょう！

どうぞみなさんお越しください。

**＜移動図書のご案内＞**

一月の移動図書はお休みです。

# とよおか100年前 ㊽

## 『豊丘村民話集』より

## 山道柿ヶ洞線のこと

城　元島　隆男

山はわれわれ百姓にとっては唯一の資源であった。薪炭はもとより、肥料としての刈敷（山野の草木を刈りそのまま田畑に敷き込んで堆肥とする方法もしくはその草木のこと）を得るために必要であった。

毎年六月ともなれば山の口が開き、老若男女問わず田村で日影山十六ヵ所（長沢の前坂島境まで）競って刈敷に出かけたものである。朝四時に起き三合メンパ上下合わせ、それに凍み豆腐に田作り、鮭の切り身等のおかず。おのおの馬にまたがって我一と出陣。良き草場に突入したものであった。夏中は二駄刈りといって、午前中一駄六束と足荷一束の七束、午後も同じ七束。これを二駄刈りという。それから秋の麦播きが終わると冬支度の薪炭採り、正月の準備にかかる次第。

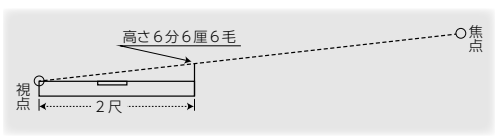
もともと現在の割り山は野山といってだれでも自由に入山できたのを明治四年に山手山、猿倉、笹久保、掘立、柿ヶ洞、郷士沢の六ヵ所に大別し、それをさらに十人口に分け、なお一戸毎に小分けしたのが現在一戸六ヵ所の持ち分なのである。

**荷車について**

明治時代はほとんど人馬の背によらなければ搬出が不能であった。しかるに大正の初めに人力車直し車（代三円）ができ、ぼつぼつ利用するようになった。人力車は直径三尺それを二尺二寸に縮め、荷台七尺五寸を付けたもの。これは都合がよくだいたい馬一駄分が楽に運べるというのでおいおい普及し、飯田製の槙作りの輪二尺三、四寸のものが入るようになった。次は樫製の輪二尺五寸、荷台一丈五寸、漆塗りの堅固な体裁のよいものが代金二十円くらいで輸入され、山材物資の搬出には必須欠かせないものとなったので、馬の必要性はほとんど失われた次第。

**測量**

前述のように車が普及し、車によらなければ山の資材の搬出のできぬ期に当たり、柿ヶ洞を除く各割り山は車が可能であったが、柿ヶ洞の道は上り下りが多く不可能なため、改修の議が起こり、大正十一年の秋、稲刈り直後の十月二十五日から測量にかかったのである。




もちろん測量器具はない。田村大井の測量はこちらで火をともし対岸の中平からためて川の勾配を決めたといわれるが、山道はそうはまいらん。そこで工夫したのが水平器利用である。柿ヶ洞入口（起点）から郷士沢入り口まで落差なしと推定し、上り下り勾配を二寸を限度とした。当時、道勾配は一間（六尺）に何寸、屋根勾配は一尺に何寸とされてあった。水平器利用測定は図の通りである。かくして障害樹木を切り払い延々三十町余の測量は委員全員五日間の出勤によって完了したのである。

四十五年の各自の所有権確立を機に林業構造事業推進には大倉区長の並々ならぬ熱意のもと、現在の自動車道が開削されたが、利用する者は茸採りくらいのものとなり、時代の波とはいえ山の関心は乏しく燃料も用材も輸入万能時代となった次第である。

五十七年前、小生二十三歳当時のことに関係した方はもちろん一人残らず物故されたので、あえてこの稿を起こした次第である。

（豊丘村民話集・第弐集）

〈昭和五十三年〉より）

文責：壬生雅穂

# 俳句短歌

外国の戦火広がる冬薔薇　片桐　洋子
子ら未来奪いし戦秋さびし　森田　恵子
ベット跡畳に青く霜の声　木下　眞水
中学の生徒全員村歌舞伎　松岡　照子
初嵐父の宿痾をまとひけり　宮下　純子
保育所の白線薄れ秋深む　林　恵美子
廃校の山懐の紅葉燃ゆ　丸山　時子
寒椿の紅つつましく散りしきる　矢島千勢子
段丘の風にうそぶく杜鵑草　池田　美和
ふたたびの命願ひて今日の月　細井　恵子

やよいの巨岩神とおわせり刈田道　吉川　明子
カリヨンの晋平メロディ秋こもる　北原　昭子

〈とよおか短歌会〉

分館の運動会は久しぶり無理と思へど見たし行きたし　壬生　千春
孫娘と吾の登園前の影あそびキツネがピョンピョン飛び跳ね遊ぶ　筒井　恵子
大すきなとりのからあげ作ったよしょうがもすったよあじはバツグン　小学二年生　筒井　嵐大
ひと月前青虫パセリを食べ尽くす育ちし若葉を吾がいただく　大原眞由美
包丁をにぎる手の節高きこと明治の母よりゆずられしもの　松尾ヒサコ
親切が過ぎれば困るのわかるかな識るや知らずや貴女の笑顔　福澤貴美恵
掘りおこす秋の畠に双子のモグラ白髭ゆらし藁巣を探す　福澤　郁文
夕映えは明日への装い天竜川の流れにひと日の光を添える　毛涯百合子
コロナ禍に倒れし友の陰膳に水割り注ぐ馴染の酒場　福澤　亀人

# 川柳

〈豊丘村川柳クラブ豊柳会〉

▼課題「暖」　福沢勝美　選

暖かでユスリカ飛んでる秋の道　安田　喜子
世辞ひとつ言ってその場を暖める　小澤　凛
温暖化海山の幸奪い去る　山本　義彦
軸吟…暖流に鮭も鰊も住み場替え

▼課題「交」　互選

楽しみだ交際相手孫とくる　林　もも子
秋みじか冬将軍と交代か　市沢　照子
人生は悲喜交々のくり返し　福沢　勝美

▼自由吟　山本義彦　選

子女が泣く戦火映像いつ終わる　原　美風
改革を言うが進まぬ税の無駄　西元　峯子
軸吟…漁夫の利をほくそ笑んでるクレムリン

# 豊丘村駅伝大会

## 4年振り チームの絆つなぐ

中芝　松村和眞

第三十六回豊丘村駅伝大会が十一月二十三日に新型コロナウイルスの影響で四年ぶりに開催され、僕は、TEAMハラタケとして参加させて頂きました。

駅伝当日の朝方は、気温がかなり低く、霧が周り一面を覆っていました。しかし、開会式が終了すると大会の開催を祝うように、空から光が差し込んできました。そして、快晴の中、一区の選手達が号砲の音と共にスタートしました。一区の選手がスタートしてからバスに乗りました。バスの中は中学校の友達や知っている人ばかりだったので雰囲気は明るくあまり緊張していませんでした。中継所につきウォーミングアップをしました。ウォーミングアップをしていると、「トップ四区に襷が渡りました」というスタッフの声が聞こえました。その瞬間「一位で襷が来て抜かれたらどうしよう」や「うまく走れるかな」という後ろ向きな言葉が頭をよぎりました。しばらくして、僕達のチームがトップで中継所へやって来ました。襷が渡り走り始めると応援してくださっている地元の人の声援や走る前にチームのメンバーに言われた事が頭に浮かび「うまく走れないかも」という不安から「絶対に一位を守り最後まで諦めないで走る」という強い思いに変わりました。走っている途中は、「一メートル後ろに二位の人がいる」と思って走りました。ひたすら続く直線、最初の一キロを飛ばし過ぎて、体力がなくなりペースを落とそうと何度も思いましたが、諦めず足を前へ前へと進めました。そして一位をキープしてゴールテープをきることができました。ゴールした時に、チームのメンバーが来てくれてとてもうれしかったです。

優勝することができたのはチーム全員の日頃培ってきた力、チームの明るい雰囲気や、言葉がけがあったからこそだと思います。また、この駅伝で「優勝した」ということだけではなくチームの中の「絆」というものも得られたと思っています。

最後に大会を開催して頂いた方々、応援してくださった地域の方々、本当にありがとうございました。

## ～シリーズ～ 豊丘の自然 No.239

### セアカゴケグモ（ヒメグモ科）

今月は豊丘村では、まだ確認されていないセアカゴケグモを紹介し、分布拡大について考える。

11／19、松川町の知り合いから「セアカゴケグモらしい個体を捕獲したが、どうしたらよいか」と電話。多少の知識（毒グモ）はあったが、本物を見たことがなかったので、さっそく、うかがった。

本種はオーストラリア原産で、日本では一九九五年、大阪で確認されたのが最初。その後、かなりのスピードで全国に拡がり、岐阜で確認された二〇一六年には長野、秋田、青森を除いた四十四都道府県で確認されるに至った。

長野県は二〇一九年、飯田（八月）で確認されたのが最初で、十二月には松川でも確認された。その後、駒ヶ根、諏訪、上田、長野でも確認され、今回の松川（二度目）は七例目。

動物は外力と自力で生息域を拡げていく。外来種の多くは人間によって持ち込まれる（外力）が、その後は自力で分布を拡げていく。（アメリカザリガニ、ウシガエル、アカボシゴマダラ、ソウシチョウ、ガビチョウ、ブルーギル、コクチバス）しかし、国内に入ってからも外力によって拡大していたのが、ここに紹介したセアカゴケグモ。ただ、松川町での二度目の確認は自力かもと考えてしまう。

（山田　拓）

# とよおか ふるさとのれしぴ 12月

## 【郷土行事食】源助かぶ菜漬け

豊丘村の伝統野菜の源助かぶ菜。『とよおかふるさとのれしぴ』では漬物を紹介しています。お好みで、にんにくやしょうがを入れてもおいしいですよ。漬物だけでなく、油で炒めても◎

## お年取り料理

十二月三十一日の晩に食べるお年取り料理。それぞれ縁起の良い願いが込められています。黒豆はまめ（元気）に暮らせるように・働けるように、きんとんは黄色にたとえて金運を、田作（たつくり）は、イワシを田んぼの肥料として使ったところ豊作になったことにちなみ五穀豊穣を、出世魚のブリで立身出世を願っています。

また、お年取り汁（大汁）も、縁起物の昆布などが入り、一年の無事の感謝と労いをし、新年もよい年であることを願って食べられます。

お年取り料理

ご家庭の味のお年取り料理で、よいお年をお迎えください。

## 【農業の行事】市田柿づくり

干してから一ヶ月程で吊るした柿を下ろし、仕上げに入ります。

まず、吊るすために残していた「ほぞ」を切って、へたを整えます。水分が多い場合は、天日干しをしてさらに乾燥させます。その後「柿もみ」を行います。柿の中心にあった水分が糖とともに外へにじみ出て、粉が出てきます。うっすら表面が白くなるまでもんだら袋で寝かせ、まんべんなく粉に覆われたら、パックや袋に詰めて、完成です。

収穫してから完成まで一ヶ月以上！おいしい市田柿をつくるには、これだけの技術や手間が必要なのですね。

柿もみ

今月で『とよおかふるさとのれしぴ』の紹介は最後です。この冊子が、農業や地域の行事、郷土食やご家庭の味を受け継ぐきっかけとなれば幸いです。

（豊丘村郷土行事食暦実行委員会）

## コンデジ修行 その31 もっと光を冬に輝け

最近の流行はコンパクトデジタル使いこなして写真力アップ

写真とは微妙な光から溢れるまでの光まで、ヒカリさえあれば必ず写りります。今回は太陽を大胆に入れ込んだ撮影に挑みました。

●太陽をまともに入れ込むと、CMOSセンサーが本来の光を感知できなく破損の原因となります。画面の中央付近に大胆に入れ込むとまず故障してしまうでしょう。そこで四隅付近に太陽を配置し素材を引っ掛けたり、フレアやゴーストだけを四隅に入れるなど工夫が必要です。最初の写真は焚火の煙が太陽を隠し幻想的になったところを、微妙な移動によりサニークロスを作り単調な色彩を表現しました。歩くことで発見はあるものです。河原に流れ着いた流木がカマキリに見えたことで、強さを表現するために太陽を入れ、より大きく見せるため寝転んで撮影しています。サニークロスの作り方は絞り数字を大きくF8以上にすることです。すると放射状に光を放ちます。散歩と言えば歩くことで見えてくる被写体があります。車では見逃しがちな風景も見つけられるのです。冬の雪の朝、残り柿の色が鮮やかに光って見えたことで、ここに太陽のフレアを入れました。雪の寒さと太陽の暖かさを一つにまとめてみたのです。コンパクトの特徴として残念なことはフレアやゴーストに虹色が発生することです。さらに絞り羽根が少ないことからフレアの本数も少なくなることですが、雰囲気は同じですので試してみてください。太陽のフレアを活かした写真は内容をより強く印象付けてくれます。ひまわりと太陽、バラと太陽など活気のある素材には率先して組み合わせてみましょう。三輪のバラは3の数字を使い更に光に向かって咲いているように左上にフレアを入れました。ゴーストやフレアは写真的には論外となりますが、発生する光を使いこなして初めて作品となります。

空の青は清涼感があり清々しく感じます。見上げてシルエットにするか、見下ろして水面を撮るか、どちらも楽しい写真が撮れますから、目線から写真を脱しひとつ上を目指しましょう。

フォトマスター1級　宮下正弘